The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 美術の身体表現とその変容 ： 展覧会「ラヴズ・ボディ〈ヌード写真の近・現代〉」より |
| Author(s) | 今井, 美樹 |
| Citation | デザイン理論. 1999, 38, p. 92-93 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/52891 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 美術の身体表現とその変容
## ── 展覧会「ラヴズ・ボディ〈ヌード写真の近・現代〉」より ──

今井美樹／サントリーミュージアム〔天保山〕

### はじめに

本発表は，東京都写真美術館およびサントリーミュージアム〔天保山〕にて開催された同名の展覧会の解題として，美術の身体表現の変遷を辿ることで，今日の美術展のテーマのひとつとして注目される「身体」「ジェンダー」についての一側面を紹介するものである。

### ヌードの定義

裸体表現についての古典的芸術論とされるケネス・クラークの『ザ・ヌード ── 裸体芸術論』(1956) によれば，裸体とは単に衣服を脱いだ状態の裸「ネイキッド (naked)」と，理念として理想化された人体の一形式である「ヌード (nude)」とに大別される。裸体表現の歴史は紀元前5世紀のギリシア美術以来，それぞれの時代様式に従い，醜く不完全な人間の身体を「ヌード」へと昇華する創造行為の変遷であるとしている。

クラークの定義においては，写真の裸体像は明らかに「ネイキッド」に属するものである。1850年代に始まるヌード写真は三つの分野（芸術家の下絵・ポルノグラフィー・美学的関心による芸術写真）へと展開していくが，芸術を目指す初期のヌード写真は被写体の生々しいセクシュアリティの回避策として，当時のサロン絵画に表現法を求めた。

裸体像とは，少なからずセクシュアリティの表現に関わる図像であり，その事実こそが裸体芸術に定義付けがなされる一因ともいえるが，ヌード写真は被写体を忠実に描く特性のゆえに，ありのままの裸体「ネイキッド」を芸術の主題として復活させたのである。

### 近代美術の動向

写実的再現性を否定し，絵画自体の自律性を目指した20世紀初頭の抽象絵画の動向においては，裸体・人体は理念を表す様式美としては機能せず，単なる一モチーフに過ぎない。ダダやシュルレアリスムあるいは同時代の幻想絵画には裸体表現は見られるものの，これらはむしろ理性や道徳から逸脱した潜在意識や夢幻の心象としてのセクシュアリティの表現と捉えることができよう。絵画が画布上の構成概念のみによって様式の確立を求めたモダニズムの段階においては，主題としての身体に無関心な客体的態度の時代であった。

絵画が身体を認識するようになるのは，1950年代に描く行為そのものが意識されたペインティング・アクトによる表現方法およびその記録によってである。身振りは画家の主体が自覚されることにつながり，他方では画布上のマチエールに着目したオール・オーヴァーの表現概念を生み出した。

一方，写真は19世紀末に確立されたピクトリアリズムの手法を経て，1920年頃より被写体を直截的に捉えるストレートフォトの概念に至る。モダニズム期の写真のヌードもまた，人体の造形美を追求するために選ばれた一モチーフの写実に過ぎない。以降，写真はその最大の特質であるドキュメンタリー性を生かしたルポルタージュへと用途が移行し，1950年代以降はフォト・ジャーナリズムあるいはコマーシャル・フォトといったマス・メディアの世界へと広がりを見せる。

### メディア時代の身体表現

1970年代以降は，社会システムとして不可欠な機能となるマス・メディアの基盤が整い，美術や写真の在り方にも大きな影響を与えた。絵画がミニマリズムやコンセプチュアリズムに集約される一方で，ハプニング，イヴェントなどのパフォーマンス性のある身体表現が登場し，写真・ビデオによる映像記録メディアが多用される。ポップ・アートやネオ・ダダに代表される，メディア社会を象徴する作品が成立したことも特徴である。写真の分野においても芸術家としての写真家が急増し，中でも特筆すべきは写真が自己表現手段として活用され始めたことである。フェミニズムの影響により多くの女性写真家が自己の模索と新たな自己像の獲得手段として写真を選んだと同時に，父権社会においてもう一人の他者である同性愛者の表現手段としても利用された。写真はメディア社会において初めて，アイデンティティを求めるマイノリティにとって，本来の姿「ネイキッド」を表現し得るメディアとして用いられることになった。

### セクシュアリティの表現

メディア社会の美術表現は，既成のイデオロギーに疑問を投げかける結果となった。その中でも大きなテーマのひとつとして「ジェンダー」が挙げられる。特に，永らく表現され続けてきた女性像のセクシュアリティに対する批判と再定義は今日もなお続いている。

ジョン・バージャーの『イメージ』(1968)は，多くの歴史的な女性像，特にヌード像が，父権社会におけるステロタイプなセクシュアリティ表現の歴史であることを指摘している。元来，絵画は所有願望の視覚的表現を本質にもっており，16世紀より続いた絵画（油絵）の時代は写真の出現によって終焉し，所有願望のカタルシスは写真メディアに取って代わられる。欲望の対象としての女性像は所有者に好都よくオブジェ化された視覚表現であり，現代においては広告写真のイメージが，大衆の欲望を扇動するステロタイプな女性のセクシュアリティ表現を受け継いでいる。バージャーによれば，芸術であれ商業であれ，父権的社会構造における所有願望の表象は，男性の需要に応じた女性性の表現であり，その系譜は現在もなお続いているという。

現代美術がジェンダーをテーマとする場合には，こうした社会構造に組み込まれた視覚表現の読み方をテーゼの一つとしている。

### 「ラヴズ・ボディ」とは

ノーマン・ブラウンの哲学書（1966）と同名の展覧会の内容は，従来のヌード写真に対し「反ヌード」を目指したものであり，1970年代以降の写真・映像を中心とした20名の作家による作品で構成されている。どちらかといえば社会学的見地から捉えられた本展のテーマは，撮影者と被写体との関係性，同性愛者やエイズという病へのイメージ，レズビアンのドキュメンタリー，身体障害者や病身といった，新たな写真の身体表現を提示し得るものとして選出されている。これらの作品に共通するのは，既成社会から疎外されているマイノリティの自己表現であると同時に，他者からの眼差しの表現となっていることである。

今日の美術における身体表現の特色は，個人のセクシュアリティや個体差，プライヴァシーを扱うことにあるが，自己と他者との関係性あるいは自己の社会的存在認識が揺らぐ時代には，個人自体が一大モチーフとなり得るが故に，「身体」や「ジェンダー」をテーマとした展覧会が昨今の傾向として見受けられるのである。